喀痰症状に寄与する因子の検討
～ながはま0次予防コホート事業より～

森本　千絵[1)]，松本　久子[1)]，長崎　忠雄[1)]，小熊　　毅[1)]，出原　裕美[1)]，
石山　祐美[1)]，砂留　公伸[1)]，金光　禎寛[1,3)]，伊藤　功朗[1)]，田原　康玄[2)]，
室　　繁郎[1)]，新実　彰男[1,3)]，三嶋　理晃[1)]

[1)] 京都大学大学院医学研究科呼吸器内科学，[2)] 京都大学大学院ゲノム医学センター，
[3)] 名古屋市立大学大学院医学研究科呼吸器・免疫アレルギー内科学

【背景・目的】明らかな呼吸器疾患がないにも関わらず，喀痰症状を訴える患者が少なからず存在する。実臨床では逆流性食道炎（GERD）症状を呈する症例で経験されることがあり，喀痰症状とGERD症状との関連を疫学的に検証する。
【方法】長浜市の一般成人を対象とし，問診（F scale問診票を含む），血液検査，呼吸機能検査などを施行し，日中・起床時の喀痰症状への寄与因子を解析した。
【結果】9804名（平均53.5歳）から回答を得た。日中の喀痰症状は3139人（32.0％），起床時の喀痰症状は1640人（16.7％）に認めた。いずれもアレルギー性鼻炎の関与はなかったが，喫煙歴，後鼻漏とともに，F scaleとの強い関連を認めた（p＜0.0001）。日中の喀痰に対してF scale 8点以上は8点未満に比しオッズ比1.97（95％ CI：1.78～2.19），喫煙歴はオッズ比1.47（95％ CI：1.31～1.66）で寄与した。起床時の喀痰に対しては，F scale 8点以上はオッズ比1.64（95％ CI：1.45～1.85）で寄与した。日中の喀痰，起床時の喀痰の両者で，酸逆流関連・運動不全症状は同等に寄与した。末梢血液像や一秒量との強い関連はなかった（p＞0.0001）。
【結論】喫煙と並びGERDが喀痰症状に寄与することが疫学的に示された。

【キーワード】喀痰症状，逆流性食道炎